

頭上陸を決定した。日本軍は空爆や砲撃を甚大な損害を蒙り各隊の連絡は断れ食糧補給も困難となり既に戦意を失い、自前に向ふ敵の上陸を目撃したかゝる弾も射たす斬壕及び周章狼狽するのみで敵は愆々無血上陸に大成した。小浜、小浜から上陸した敵は直ちに飛行場を占領し戦車隊は盛に日本軍陣地を砲撃しつゝ、八ヶ岳附近に集結した。翌十七日、日本軍連射砲隊は一斉射撃を敢行し、八ヶ岳方面から迫する敵戦車隊と交戦す。三時間余りに及ぶ相當の損害を予えたけれど砲身焼け、射撃不能となり陣地は敵弾に潰され無力となった。そこで敵はますます猛威をふるい、赤坂方面から城山陣地めかけ砲撃を開始した。

新波止場から上陸した敵は川平、西ヶ丘区域を掃蕩し新校舎に陣取り決地方面から来た敵は東江ヶ、東江と迫つた。

(十三日)

そして敵作業隊は飛行場の修復に果命となり上陸後三日目の四月十八日の午後には戦車隊の着陸をなす事が出来た。こうなつた。

「註」右、新校舎は伊江民学校のこと。城山陣地とは各部隊の本部隊の陣地のこと。

### 二、夜襲敢行

日本軍は夜襲を企図し残る兵員は少年義勇軍と婦女子を加え急造爆雷、手榴弾、小銃等貧弱な兵器を投身する襲撃を敢行し、敵は多大の損害を蒙るに及ぶ。化学兵器と象徴的敵襲に難を兵員に對し日本軍は只敗れるのみであつた。だが日本軍は僅かに残る兵員と傷つもの者集合し互に對舞しあつて一周間の夜襲を続け残る一兵に至るまで戦い抜き遂に護国の華を散つた。斯くて四月二十二日には新校舎屋上にアメリカ国旗が掲げられ翺々と

飛つた。

三、炊で沖繩本島へ

日本軍將兵の中には伊江島戦士には敗れたけれど沖繩本島に渡つて真部山に在る宇土部隊に加入し戦士に参加せんとする軍人精神に燃え、五六人位を組んで海軍に漂流せる木片を組んで粗製劣製の筏を頼りた暗夜に乗り大海に漕ぎ出した者がある。ところが潮に吞みこまれ、潮流のため逆の方向に流される者があり、敵弾に射たる者があり、大失敗に終り、目的地に達し、命捨したる者、数人は僅少であつた。伊江東江と大城清菜君は此の島牧を体験した一人である。

四、住民の自爆

住民は洞窟にたつて敵の上陸を知ると全く士気を失ひ、敵に反抗して射殺せらる者も居た。或は敵に殺害せしめらるより先に自爆する者も居た。かまうにして一夜全滅となり、聞くも哀れな犠牲者、相当数ある事は実に遺憾である。

五、空襲工作

伊江島は日本本土攻撃基地として米軍は、戦中も飛行場の修復、擴張、又は新設に奮勵し、そのために住民の空襲工作のた四月十九日、日土陸早々燈台南側の洞窟に潜伏して居た金城又波知念十太郎、知念加賀助の諸氏を誘ひ、去つて彼等を道案内者として方々に潜伏して居る住民を集め、十がう原に十数棟の幕舎を建て、收容し五月下旬には二十人を突破した。西江地区の知念鎌太氏を班長に命じて炊事衛生作業、警戒官等の係を置き住民の保護をさせた。炊事場は一食一握(約八勺)宛配給し、働者は作業に勤負した。作業者は煙草、缶詰、菓子等の戦果を得る

の喜んで大動した。

六、村長の最後

戦争當時の伊江村長は真采里豊吉氏(六十三才)であつた。同氏は井川部隊本部に在つて常に兵負を勵まし軍に協力されて居た。そして四月二十日には白鉢巻姿で手榴弾を握り壯者を凌ぐ。元氣で本校附近の夜襲に参加せし遂に戦死をとりうけた。

七、鉄瓦と散る花

真采田節子(23)大塚ハル子(24)大瀧壽美子(26)永山八生(26)崎波ヨシ子(24)この五人は井川部隊本部附を命ぜられ負傷兵の看護に當る居た既に死を決心して居たこの五人は黒髪を刈り落し軍服・軍帽・帯・剣・巻脚絆・縮上靴・すぶり服を男子にかえ、爆雷を背にたすにはマシ子を握り四月二十一日午前三時頃井川部隊最後の夜襲に加わり、儲方副官に附添

十三世

新校舎南側の敵戦車に奇襲した。物凄く爆音と共に戦車は横坐せしめられ、可憎青春五石の花は満き、鉄瓦の中心木葉微塵と散り去つた。

三、空襲其の他、日記抄(伊是名正信氏日記帳より)

(一)昭和十九年中

△昭和十九年一月十七日―伊江島飛行場は愈々重要性を帯び其の建設を急がねばならぬ事となつて今日から各戸一人以上奉仕作業にあつた。村民は喜んで其の作業に従事した。

△同年三月五日―戦争を勝ち抜く迄は是非国民の貯蓄面を強調せねばならぬ事と最近郵便貯金が激増した。昨今郡(國頭郡)貯蓄強調なので郵便局は貯金事務に忙殺されて

△同年四月二十二日―飛行場工事場行きの人馬の声、行馬車、荷車

の首孝校附近に去来た日本軍炊事場の雑音に自分の家のあたりは干赤三四時頃からうごいたかえしている昨今である。

△同年四月三日 飛行場の工事関係で西より全部、西より部落の一部が立ち退きをなすべく日本軍部から命令を発せられた。

△同年五月二日 都合で依り不記並退き命令は取り消された。

△同年五月三日 山敷の松の立木が日本軍の用材として盛に伐りたおされていく。

△同年六月五日 空襲警報の発令がある(後で解除)

△同年六月二十九日 物資欠乏に困る様になった燈用石油等の多くが山羊の油をこれに利用して居る昨今である。

△同年七月九日 本日、孝集会で重大戦局に対する各種事項の伝達があった。

△同年七月十日 新聞は再度の北九州空襲を報じ人心不安の

能心である。

△同年七月十日 日本軍部より重大事件を申し渡された。

それは伊江全島の墓所全部を軍に提供せよとのことである。

村民は非常に敬馬をぞこ心配した。

△同年七月十三日 昨日の革命を果すべく村民一同本日各自の墓所整理に大馬力をかけた。そのために本年の盆祭は行事奉行困難になった。

△同年七月十七日 村民を集めて部隊長は次の注意をよえた。

一、戦局は月一日と切迫し敵は何時攻め来るか知らぬから皆々決心を固めよ

一、年寄り子供は村外に立ち退く事

一、男子は全部竹槍を用意すべし

右の伝達で村民は大へ心配したが部隊長の次に中隊長が大

東亞戦争は日本が必ず勝利する」といふ言を村民は不孝の胸をなだめた。

△同年七月十八日 村民一同防空壕掘りに大馬力をかけた。昨今であら。

△同年七月二十日「ヤイ。心」島玉砕の報つたやうに人心不安。

△同年七月二十四日 東條内閣總辞任の報に接し此の重大戦局に内閣の總辞任は如何した事かと心配した。

△同年七月二十九日 役場の掲げられた戦果報告を見て喜んではいた。此の頃は何の報告もなく戦局に對する不安、淋しさを、またやるといふ思いをさせられる昨今である。

△同年八月一日 疎開問題で人心不安の状態である。

△同年八月十一日 村には軍部命令に依つて「防空演習」に参加する事なる。午後五時半から繰入りの練習をした。演習終

十三日

了後村民一同に對し西村部隊長のお話があった。

小演習の成績はおほむね良好であつた事。

(1)是非老人子供は疎開せよとの事

右のお話があつた後に村当局から疎開について具體的な説明があつた。それに依ると国の經費で伊江島から約千四百石程、

熊本県から崎果を転おせよとの事であつた。

△同年八月十三日 疎開者の郵便貯金拂戻に局は大忙しを極めて居る。

△同年九月二十三日 村内住家の比較的なるものは殆ど全部が軍部の資金に使用された。東江と、糸山耕基君宅は西村部隊長の宿所となつた。

△同年十月十日 日本軍部では今日から大玉な糧食を据え付けて現在の飯場前(学校敷地)に井戸掘りを始めた。

△同年十月六日 山越森附近を日本軍が陣地とし、昨今田村部隊が盛に攻撃をなしている。

△同年十月十日 大事件が起った。朝食の折敵村未離れの声がある。注意すまじから爆音がきこえらる。胸をあたえ敵族を防空壕に入ら自分はそのわがわがに取場所(出勤した)家の門を出る頃には既に敵村は島近く空に見えた。「メニカミラ」を附近を行く頃には既に敵村から打ち出す機関銃其の他の轟音に島は包まれて居た。石垣の側、木の下をたのりたどつて幸うじて取場所(郵便局)に着た。午前の襲撃で飛行場は相当の被害があつた。盛子丸もさふた。敵村が去つた折を見はかう、対岸の本村を見たら瀨久地港が大火災を起して居る。瀬底島の方面にも盛に煙が立つ。一時何もないえぬ不意の念にかうした。萬時は天運に任すべく意を固めた。午後の襲撃の折弾が家の馬屋の先

(十三)

に落ち其の破片が台所の戸を打ち破り器具をこわしアールを射殺し壁や天井等弾痕目もあつた。お程であつた。それをも敵族は壕の中を免れた。家の附近には兵隊さんか数石負傷し一人は戦死した。お隣の「村元の屋」のおぼろんが弾にあつて負傷した。李校のコンクリートの建物は弾痕を見るも、たまたまいせよになつて居た。生れり始めて見る実戦の光景さるで悪夢を見ている心地であつた。

△同年十月十一日 敵村に対する防衛策を考へて一日は過すた。不意、不意

△同年十月十二日 昨日同様常に空に注意を拂ひつゝ一日を過す。△同年十月十三日 午後四時頃空襲警報が出た。今度こそは大爆撃だと細心の注意を拂つて居たが、とうとう晩方には解除になつた。



すとい音を立て敵艦が飛来した。相関銃掃射の音で島を包  
 み込んで果敢に狂った。午台の三時頃又もや敵艦がやってきました。午  
 台に比し更に猛烈な勢力をやってきました。島の上空に現れた敵艦  
 はまたかう群れ飛ぶようにうごめいた。壕の中を聞く敵艦の音のこわ  
 さ、実に身ふるす程で、いまは心地はしなかつた。敵艦が去つて壕を去つ  
 ても家はすべり破壊されて居た。後想外に破壊されていた。  
 全潰同様を屋根から壁、戸、屋内の諸道具、それらも自もあつ  
 たらぬ惨状であつた。斯く被害を受けたのは家の後の方十字路と五〇キロ  
 (?) 爆弾が投下された為であつた。屋内に入らば事は勿論不可能に  
 なつたので比較的安安全な大溝家の壕に行つて合休すこととした。  
 △同年三月十六日 戦局は益々重大化して伊江島も大戦場になるかも  
 知れぬから六、七、八、九、十、十一、十二以下の者は疎開すこととした。この革命による  
 村当局は村民通達を発した。 晩方敵の一枚島の西端に飛来

十三世

し降伏せよとのビラを散布した。  
 △同年三月一日 三月三日、伊江島空襲があつた。朝の七時頃、  
 遠雷の響きがすうと思つた。敵艦が来襲した。物すとい爆  
 轟は朝から午台の三時頃まで続いた。各所に火災が起り伊江島は火の  
 海と化した。農業組合書記具志堅亮君が姉と共に自分の壕  
 の中で爆死した。  
 △同年三月六日 軍より、布告は物すとい文句で老幼の疎開を  
 迫つた。一革命に依る疎開に従わぬ者の首には三尺の秋水が飛ぶよ  
 う、という指示もあつた。戦局は如何になり行くものやう最悪の場合を考  
 へるに案に情けなき感がある。  
 △同年三月十七日 事務(郵便局)は閑散であつた。しかん閑散であつた  
 ため程戦局に対する不安の念は何やかやと色々のことを考へ案に  
 情けなき感がある。邦家の出来ごとなれば如何



ともす事はおまふ。又人事を尽して天命を待つより外致しおが  
ない。あつた。平和の日が来るものやう。

△同年三月十九日 戦局は不意を以て一日をくらす。昨今ある

△同年三月二十三日 又も空襲があった。各所に火事があった。アラ道  
通に猛火に包まれ農業組合倉庫「ミラミ」食堂等も焼失した。

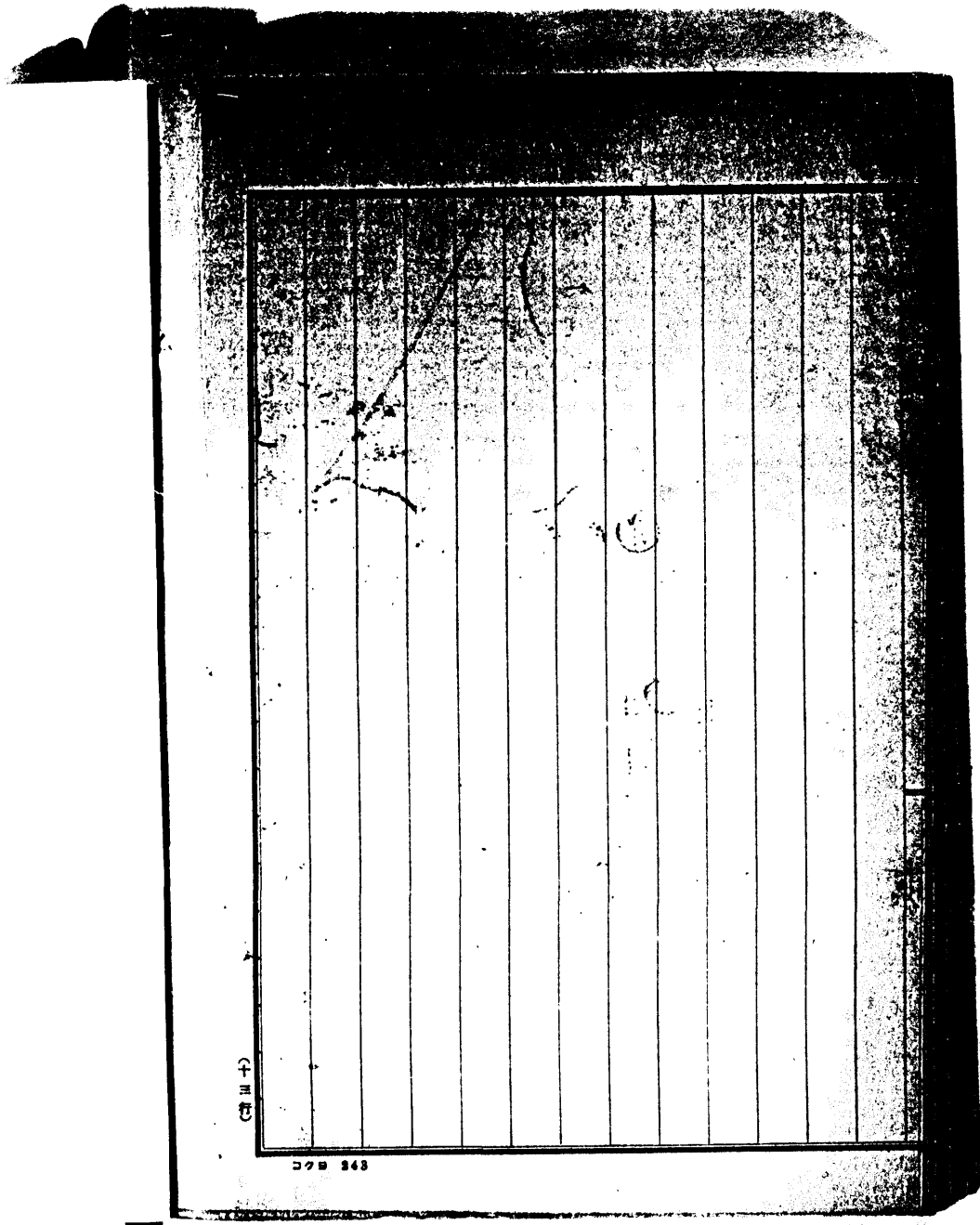
△同年三月二十四日 昨日比軍曹が注意を与えた。通り今日も拂曉  
から空襲があった。

△同年三月二十五日 空襲で暮れる。昨今である。爆音がある。壕に潜み  
ておる。壕を去る。何かなすとはなく。又ぶうくすうみ。さるで。火  
をくす。生活を経て居る。精神上の心配。食糧の不足で時折  
つらくする。ともあつた。

△同年三月二十六日 島にいた。よす夜九時頃。獨木舟で本島に渡  
る事になった。航行中にわれ等の舟の上を敵機が飛んだのもう取

千三三

後にも覚悟した。弾はつた。過ぎ去り「ボット」した。夜の十一時  
頃。河崎の浜に着いた。其の折。振り返つて島を見ると。照明弾で  
島の前面は白く照らされた。始めに見る。照明弾は肝  
まつた。島から本島へ。獨木舟を渡る事のおまは。おま  
く自分等が最後であつたと思ふ。あ、伊江島よ。



十三

コク 243

